

塩谷 茂樹

1. はじめに

本稿の目的は、従来ほとんど取り上げられることのなかった deverbal verbal suffix -s-について、その主たる意味を明確にするとともに、suffix -s-を有する語の歴史を、形態および意味の両面から究明することにある。

さて、deverbal verbal suffix -s-なるものの存在を、最初に指摘したのはおそらくRamstedt(1912)であろう¹⁾。彼は、蒙古語、チュルク語との比較研究を通して、deverbal verbal suffix -s-は《軽いintensiveまたはfrequentativeの意味を持っているように思われる》と指摘した。

しかし、分析方法が、純粹に蒙古語内部だけに基づくものではないこと、そのため、suffixの意味記述も、必ずしも十分になされているとは言えないことを理由に、本稿で簡単に私見を述べる次第である。

2. 蒙古文語(Mo.)に見えるdeverbal verbal suffix -s-

2. 1. Mo. üjesküleng

Mo. üjeskülengに対する中世蒙古語及び現代語の諸形式は、次のようである。

(秘) 兀者思古良 塔刺 卯危 額薛 客額罷者 必 (208)

看像 容貌 歹 不曾 說了也者 我

üjesgüleng tala mau'üi ese ke'ēbe-je bi.

(お前の) 容貌が悪いと 言わなかったぞ 私は

(ム) üjeskü ere 《красивый мужчина》(377)

美しい 男

üjeskülengtü bolba tündü 《стал ему красив》(377)

美しく なった 彼にとって

(ハルハ) үзэх 《смотреть》

үзэсгэлэн(г) 《1) зрелище, 2) выставка, 3) красота, прелесть》

үзэсгэлэнт(эй) 《прекрасный, прелестный, красивый》

(内蒙古) üje- 《(及動) ①看…》

üjesküleng 《(名) ①展览会 ②美、美麗、美觀、美貌》

- üjeskülengthei, üjeskülengthü 《(形)美的、美麗的、漂亮的、幽雅的》
 (オールドス) wdži- 《voir》
 wdžis^kχwleg 《beau à voir, joli》
 wdžis^kχwlegt^{ʼi}, wdžis^kχwlegt^{ʼu} 《beau à voir, joli》
 (ブリヤート) үзэхэ 《смотреть》
 үзэсхэлэн(г) 《1)зрелище; үзэсхэлэн хайхан / красоты,
 2)выставка; үзэсхэлэнгэй газар / музей》
 үзэсхэлэнтэ(й) 《прекрасный, прелестный; красивый》
 (カルムイク) үзхэ 《sehen》
 üz^uskəlg 《hübsches aussehen, schönheit》
 üz^uskəlqtē 《hübsch, schön》

Mo. üjeskülength は、üje-が《見る》を意味する動詞語幹、-külength が deverbale nominal suffix であるから、üje-s-külength と分析できるのは、明らかである。したがって、ここでは、deverbale verbal suffix -s-が、どんな意味機能を果たしているかが問題の中心となる。筆者が従来から抱いてきた疑問は、deverbale nominal suffix -qulang/külength がなぜ、化石的動詞語幹 *üjes- (蒙古語族では、現在、実証不可能である) に接尾し、生産的な動詞語幹 üje- に接尾しなかったのか、つまり、なぜ、üjeskülength が可であり、*üjekülength (または *üjegülength) が不可なのかという点にあった。

筆者は、この1つの解決策として、最初、次のような推定を行なった。それは、deverbale nominal suffix -qulang/külength の接尾しうる動詞語幹に、何らかの共通性が見られるのではないかという推定である。そこで、-qulang/külength の接尾しうる動詞語幹 (特に、動詞語幹に接尾したことが共時的に明らかなもの) を、蒙古文語より抽出すれば、次のようである。

- | | |
|-----------------------------------------|----------|
| 1. 動詞語幹末が子音sの時 | (L) (蒙漢) |
| iskülength 《酸っぱい》 <is- 《発酵する》 | vi. (不及) |
| öskülength 《成長した》 <ös- 《成長する》 | vi. (不及) |
| geskülength 《溶けた》 <ges- 《溶ける》 | vi. (不及) |
| ölöskülength 《空腹(の)》 ölös- < 《飢える》 | vi. (不及) |
| umdayasqulang 《のどの渇き》 <umdayas- 《のどが渇く》 | vi. (不及) |
| bayasqulang 《喜び、楽しみ》 <bayas- 《喜ぶ》 | vi. (不及) |
| üjeskülength 《美、展覧会》 <üje- 《見る》 | vt. (及) |
2. 動詞語幹末が子音dの時

čadqulang《満腹(の)》<čad-《満腹する》 vi. (不及)

3. 動詞語幹末が母音の時

amuɣulang《平和(な)、平穩(な)》<amu-《休む、安らぐ》 vi. (不及)

gemişgülang《後悔》<gemiş-《後悔する》 vi. (不及)

以上の結果、-qulang² 2) の接尾する動詞語幹は、üje-を除くと、すべて、intransitive (不及動詞) に限定されているという共通性があることがわかる。ちなみに、このことは同じ deverbial nominal suffix -dal², -mal² には見られないことである。したがって *üjes- の -s- は、intransitive forming suffix と見なすことができる。しかし、この考えは、以下の理由により、完全には受け入れ難い。

1. 蒙古語では、transitive → intransitive に変換する suffix (passive voice suffix) と言え、-yda² ~ -da² (-ta²-) (これらは、いずれも音韻的に条件付けられた異形態である) があるのみで、従来 -s- に関してその報告例はない。また、動詞語幹 üje- の passive voice は、通常、üje-gde- であるから、もし、üjes- が実在したとするなら、両者の違いは一体全体、何であったのか。

2. 土族語 udzælɣadal 《展品》の語構成、

udzæ- 《看(見る)》

udzælɣa- 《讓看(見せる)》

udzælɣadal 《展品(見せもの→展示品)》

すなわち、udzæ(V)-lɣa(causative)-dal(V→N) を、Mo. üje(V)-s-küleng(V→N) と比較する時、Mo. üjesküleng の代わりに、なぜ、*üje-gde (passive)-küleng あるいは、*üje-gül(causative)-küleng が、語として形成されなかったのかという疑問が残る(ただし、上述したように、実際には、-küleng の接尾しうる動詞語幹には、制限(intransitiveのみ)が加わるから、*üjegülküleng の可能性は極めて少ないであろう)。以上、1., 2. のいずれの問いに対しても、何ら実証的な裏付けを得ることができないため、結局の所、*üjes- の -s- を intransitive forming suffix とする解釈には、やはり難点があると言わざるをえない。

ここでは、引き続き、üjesküleng の -s- をどのように意味解釈すべきかという点について、考察を続けることにする。ここで中世の文献『ムカディマツト・アル・アダブ』の例を見てみる。

① üjekü ɣaɣar 《место, где смотрят》(377)

見る 場所

② üjeskü ere 《красивый мужчина》(377)

美しい 男

üjeskülengtü bolba tündü 《стал ему красив》(377)

美しく なった 彼にとって

先ず、②の前者üjeskü に対し、N. Poppeは、(ム) (377)で、üjeskü[lengtü]と転写し、②の后者üjeskülengtüの脱字と見ている。これは、蒙古文語では、後者が実証され、前者が実証されないことから、容易に考えられることである。しかしながら、筆者の考えでは、deverbal nominal suffix -qulang² は、起源的には、*-qu² (V→N)+la² (N→V)+ng(V→N)から成るcompound suffixであり、-qu² (-qu/-kü)は、未来形動詞 (nomen futuri) 語尾である³⁾と解釈されるから、ここでは、üjesküを脱字ではなく、当時の実在形式であるとする立場をとりたい。形態的に、①は、üje-kü《見る(べき)》、②の前者は、üje-s-kü《美しい》と分析されるから、ここでは、deverbal verbal suffix -s-の有無によって、両者の意味の派生関係を説明しなければならないことになる。

これに対する1つの解釈として、①→②への意味変化の過程を、次のように想定してみてもどうか。

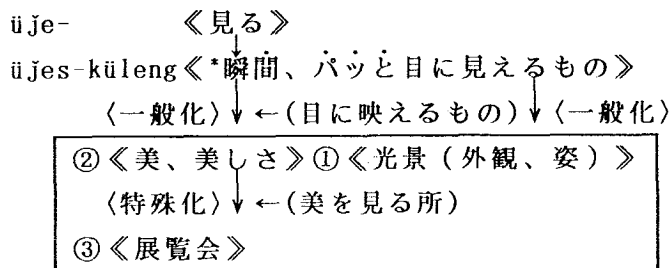
《見る》→《*瞬間、パッと目に見える(べき)》→《*目に映える(べき)》→《美しい》

これは、すなわち、üjesküleng の-s-を、momentary aspect《瞬時相》を表示するdeverbal verbal suffixであると解釈する立場である(これは、あくまでも1つの解釈に過ぎず、deverbal verbal suffix -s-の主たる意味は、Mo. üjesküleng の一語だけから判断されるものではなく、以下に述べる様々な例から総合的に判断されるべきことは、言うまでもない)。

もしこの立場をとるならば、(ム)に見えるüjesküは、次のように解釈するのが妥当であろう。

—動詞語幹üjes- は、中世蒙古語(『ムカディマツト・アル・アダブ』の言語)では、すでに、元来のmomentary aspectの意味を失い、その結果、動詞としては機能せず、語尾-küとともに広義の名詞として機能していた。—

最後に、Mo. üjesküleng の意味変化の過程を総括的に説明することにする。Mo. üjesküleng は、現代語諸方言では、一般に、次の3つの意味、《①光景 ②美、美しさ ③展覧会》のいずれかで用いられるようであるが、これは、次のような経過をたどって、意味変化したものと思われる。



なお、中世の文献（秘）では①の意味で、（ム）では②の意味で用いられていることを付記しておく。

2. 2. (A) Mo. kömöske

(B) Mo. anisqa

(A)(B)に対する中世蒙古語及び現代語の諸形式は、次のようである。

(ム) kömöske 《веко》(250)

(ム) hanisqa 《бровь》(181)

hanis- 《сомкнуть》(181)

(華・甲) 哈泥思*合 hanisqa 《眉》

(土族語)

(土族語)

東溝方言: komosgo 《眼簾》

東溝方言: xanasqa 《眉毛》

那龍溝方言: k'uomosguo 《paupière》

那龍溝方言: xanasqa 《sourcils》

東溝方言: xanə- 《閉眼》

那龍溝方言: xani- 《fermer les yeux》

(ハルハ) хөмсөг 《брови》

(保安語) 大墩: хамсэх 《眉毛》

(バルガ) хунтөг 《眉毛》

~məimao (眉毛 méi·máo)

(カルムイク) kömškə 《augenbrauen》

hani- 《閉眼》

күмсг[күмсег]《бровь》

(ブリヤート) хүмэдхэ 《брови》

(ダグール)

cf. (満州文語) xumsun 《眼瞼》

モリンダワー方言: хара:ka: 《瞳人》

(cf. balk*- 《閉眼》)

(錫伯語) (jasəj) kumskun 《眼皮》

ハイラル方言: anixa 《Pupille》

(cf. балхү-《закрывать》)

(ハルハ) anisqa 《веко》

аних 《закрывать》

(A) Mo. kōmōske

Ramstedt(1935)は⁴⁾、[kōmō-ske vgl. kōmō-g]と記し、kōmōskeをkōmōgと比較し、両者を共通語根 *kōmō-からの派生語である可能性を指摘している。

(L) Mo. kōmōg, kōmōgei / —

《n. Shed; roof, esp. roof over a portico, eaves; Shelter; awning, canopy; overhang of a mountain》

小沢(1978)は⁵⁾、kōmōg に見える *kōmō-を、日本語コム《包みかくす、封じこめる》、コムル《殻のようにかこまれた所に入って、外界と接触を断っている意》と比較し、《事物を外界から隔離し遮断する》意味の動詞語根であったと考えている。さらに、

Mo. kōmōrge < *kōmō-r(V→N)-ge(N→N)《(国の財産を収納する)倉庫》と共通語根 *kōmō-を有していたことにも、言及している。

筆者は、Mo. kōmōskeは、kōmōg, kōmōrgeと同語根語であるばかりでなく、さらに、Mo. kōmōri-《ひっくり返す》、kōmōkei《下唇》とも、同語根であると考え。

kōmōri- / хөмрөх

(L) 《to upset, overturn, to cover with a bowl or other concave object》

(H) 《to upset, overturn, to cover over with a concave object》

(蒙漢)《翻、倒翻、倒扣、傾覆》

(III) 《saba-yi uruγu qanduyulqu Jerge-yin》

器 を 下 に 向ける 等 の

より、kōmōri- は、元来《器や凹面形のもので覆う》が原義であり、それが《(器を)ひっくり返す》の意で用いられるようになったのである。

また、kōmōkei に対しては、

kōmōkei / хөмхий

(H)《the lower lip》; хөмхий зуух 《to bite the lower lip》

(蒙漢)《下唇》; kōmōkei-ben jaγuqu 《咬下唇》

(III) kōmōkei-ben jaγuqu 《dooradu uruyul jaγuqu》

下 唇を 咬む

より、kōmōkei は、元来、《上唇・上歯で覆うもの》の意から、《下唇》を意味するようになったものと考え。

また、ダグール語で、形容詞(または副詞) kum, 動詞 kum- が、《かぶせる、伏せる》の如き意味を表示するが、これは、まさに上述の *kōmō-が、ダグール語で語根として残存していると思われるべきだろうか。

kum	《(形) 扣、蒙住的》	かぶせた、伏せた
kum əulən	《(圧頂的) 密雲》	(覆いかぶさるような) 厚い雲
kum dar-	《扣上、扣住》	すっぽりかぶせる。しっかり伏せる。
kum-	《(動) 薩滿法術、以重物压其身、 <u>面朝下静躺</u> 》	シャーマニズムの術。重い物で、体を押え、静かに <u>うつ伏せる</u> (Lit. 顔は下に向け、横たわる)。

したがって、筆者は、Mo.kömöri-, kömökei及び、ダグール語kum, kum-より、共通語根*kömö-に対し、《事物を上から覆う》の如き意味を仮定する。

以上の結果、*kömö-に対し、

- ①《事物を外界から隔離し、遮断する》(小沢)

(Mo.kömö-g, kömö-rge)

- ②《事物を上から覆う》(筆者)

(Mo.kömö-ri-, kömö-kei)

より、《事物を外界から遮断し、覆う》という意味を設定することができる。

さて、Ramstedtは、Mo.kömöske に対し、kömö-ske と分析されるが、語末の要素-skeに対しては、何ら言及していない(-skeを、deverbal nominal compound suffixと見ていたことは十分想像できるが)。

筆者は、Ramstedtの考えをさらに発展させ、*kömö-s-ke⁶⁾と分析し、この-s-を、deverbal verbal suffixで、momentary aspectを表示するものと解釈する。その結果、Mo.kömöskeに対し、上で設定した意味を参照することにより、《瞬間、パッと目を外界から遮断し、覆うもの》といった意味を仮定することができる。これは、Mo.kömöskeは、たとえば、現在、ハルハ方言では、хөмсөг 《бровь(眉)》を意味するが、元来は、《веко(臉)》が原義であったことを物語っているに他ならない。

このことは、中世の文献『ムカディマツト・アル・アダブ』で、kömöske が《臉》を意味していたこと、

(ム) nidün-i kömöske hurbaqsan

臉 が 裏返った

《его веко выворотилось》(250)

(cf. ハルハ зовхи урвах 《臉が裏返る》)

さらに関連諸言語で、満州文語(Ma.)xumsun・錫伯語kumskunが《臉》を意味していることから、十分支持される。

ところで、Mo.kömöske: Ma.xumsun は、語構成分析の結果、前者が蒙古文語内部で、同語根語kömö-g, kömö-rge, kömö-ri-, kömö-kei等をもつが、後者が満州文語内部で、同語根語をもたないことから、時代的には明らかではないが、Mo.→Ma.へ

借用された可能性が高いものと思われる。仮にそうだとすれば、Mo. → Ma. へ借用された時期には、Mo. *kömöske* は明らかに《瞼》を意味していたことになる。

(B) Mo. *anisqa*

一方、*anisqa* は、*ani-s-qa*⁶⁾ と分析され、この *-s-* を *deverbal verbal suffix* で、*momentary aspect* を表示するものと解釈する。また、動詞語幹 *ani-* は、次のような意味をもつ。

ani- / *аних*

(L) 《to close one's eyes; for a wound, crack, or fissure to close》

(H) 《to close the eyes; to close up》

нүд аних 《to close the eyes; to die》

шарх аних 《for a wound to close up》

(蒙漢) *ani-* 《(不及動) ①閉眼②癒合③閉合》

(Ⅲ) 《*anisqa qamkiqu jerge-yin*》

瞼が 閉じる 等の

したがって、Mo. *anisqa* に対し、動詞 *ani-* 《(眼・傷が) 閉じる》より、《瞬間パツと目を閉じるもの》という意味を仮定することができる。これは、Mo. *kömöske* の場合と同様、*anisqa* の原義が《瞼》であったことを物語っている⁷⁾。

さて、ここで、Mo. *anisqa* の *ani-* が、実際に *momentary aspect* の意味を保持していたかどうかを、中世の文献『ムカディマツト・アル・アダブ』より、検証して見ることとする。

① *hanis·ba nidün-i* 《*сомкнул глаза*》(181)

閉じた 目を

② *qata'ū hanis·ba* 《*сильно чихнул*》(295)

激しく くしゃみをした

hanisqa·ba 《*чихнул*》(181)

くしゃみをした

hirēbe hanisqa·qsan 《*произнес благое пожелание чихнувшему*》(185)

祝福した くしゃみをしたものを

(ム) では、上で見たように、*hanis-* は、

① 《(目を) 閉じる》

② 《くしゃみをする》(cf. Mo. *nayitayā-* 《to sneeze》)

の2つの意味で用いられている。また《(目を)閉じる》に対し、実証される形式は、hani-ではなく、hanis-の方である。しかし、蒙古文語ani-や、現代語諸形式(ハルハаних、プリアートаниха、カルムイクаньх、保安hani-、土族ханә-)から、当時、hani-: hanis-の形態的対立があったものと推定される。

さらに、ここでは、hanis-が、現代語諸方言では見られない《くしゃみをする》の意で用いられたことに注目したい(《くしゃみをする》に対しては、通例、蒙古文語nayitaya-及びそれに対する現代語諸形式が対応する)。これに対して、筆者は、次のように考える。すなわち、hanis-は、hani-s-と分析され、元来、単に《(目を)閉じる》の意味に、momentary aspectの意味を付加した、《瞬間、パッと目を閉じる》という意味を表示したため、それが《くしゃみをする》という瞬間的な行為をも意味するようになった(意味の特殊化)。換言すれば、《くしゃみをする》という瞬間的な行為を表わすのに、hani-ではなく、hanis-が用いられた背景には、deverbal verbal suffix -s-のmomentary aspectの意味が作用したものである。

以上の結果、『ムカディマツト・アル・アダブ』に見えるhanis-は、形態的には、hani-と対立し、意味的にはmomentary aspectの意を、内に含んでいると解釈することができる。

以上、(A)、(B)で見たように、Mo.anisqa, kōmōskeの指示物は、元来、いずれも、《眉》ではなく、《瞼》に有利であることが、語構成分析の結果、明らかとなった。それでは、両者は、元来、(蒙古祖語において)全く同一物を指示したのであろうか。ここで、再度、動詞の語根部分の意味を検討してみると、両者には、ある相違点があることに気づく。

前者anisqaは、動詞ani-《(眼・傷が)閉じる》から派生した語であり、《閉じる》ためには、開口部の両面がないと、閉じるとは言えない。すなわち、上瞼と下瞼が合わさって、はじめて閉じることが可能となるわけだから、Mo.anisqaは、元来、上・下瞼を指したものと考えられる。

一方、後者kōmōskeは、動詞語根*kōmō-《事物を上から覆う》から派生した語であり、たとえば、これより、さらに派生した動詞kōmō·ri-《ひっくり返す(物の表や上を、下に向ける)》の円弧上の移動方向は、上瞼のそれとまさに一致し、下瞼は直接関与しないことから、Mo.kōmōskeは、元来、上瞼のみを指したものと考えられる。

以上の結果、筆者は、Mo.anisqa, kōmōskeに対し、元来、次の部分を指示していたものと推定する。

anisqa 《*上瞼・下瞼の部分(瞼の総称)》

kömöske 《*上脣》

この推定は、蒙古語で、《唇》と《下唇》が異なる単語

uruγul / уруул 《上唇・下唇の部分（唇の総称）》

kömökei / хөмийи 《下唇》

で表わされていることと合わせて考えると、一層興味深い。

最後に、Mo.anisqa, kömöskeの意味変化の過程を説明することにする。

先ず、Mo.anisqa, kömöskeの意味を、文献に照らし合わせながら、その跡をたどってみると、次のようになる。

【中世蒙古語】

『ムカディマツト・アル・アダブ』

hanisqa 《бровь（眉）》

kömöske 《веко（脣）》

中世の漢蒙対訳語彙集では、漢語の《眉（毛）》に対する蒙古語は、次のように見える（ただし、《脣》という項目は設定されていない）。

至元訳語⁸⁾ (1325): 合你四〔匣〕

『華夷訳語』 (1389): 哈泥思*合

『登壇必究』 (1599): 哈泥四哈

『盧龍塞略』 (1610): 哈泥思哈

薊門防禦考⁹⁾ (1621): 克木斯克

【近代蒙古語】

『三合便覧』¹⁰⁾ (1780): xumsun, 眼胞, anisqa (anisxa)

faitan, 眉, kömöske (kumusge)

『綏遠志』 (1908): 庫木色克《眉》

以上の結果は、次のようにまとめることができる。

	蒙古祖語	中世蒙古語 → 近代		蒙古語	
		西部蒙古語	東部蒙古語		
(h)anisqa	《*上・下脣》	《眉》	《眉》	—	《脣》
kömöske	《*上脣》	《脣》	—	《眉》	《眉》

~17c~

1. 中世の諸文献（1621年の薊門防禦考以前）では、

hanisqa 《眉》

kömöske 《臉》

で表わされ、この意味分担は、一見した所、現在の土族語に踏襲されたかのように見える。

(土族語) 東溝方言：

那龍溝方言：

xanasqa 《眉毛》 xanasqa 《sourcils》

komosgo 《眼簾》¹¹⁾ k'uomosguo 《paupière》

2. 近世の文献(1621年の薊門防禦考以後)では、両者の意味は逆転して見え、現在の蒙古語等に踏襲された。

ただし、Mo. anisqaは、近世から現代にかけて、Mo. jobki¹²⁾(《臉の外角》→《臉(総称)》)に取って代わられた。

(オールドス) dʒov^kχi 《paupière》 / k^omös^kχö 《sourcil》

(ハルハ) зовхи¹³⁾ 《веко》 / хөмсөг 《брови》

(カルムイク) зовк[зовкъ] 《веко》 / күмсг[күмсег] 《бровь》

さて、最後に残された問題は、Mo. anisqa, kömöskeの意味変化の過程をどのように説明したらよいか、特に、(h)anisqaの意味変化の不自然さ(《*上・下臉》→《眉》→《臉》)を、kömöskeの意味変化(《*上臉》→《臉》→《眉》)との関係において、どのように扱えたらよいかという点にある。

これに関し、筆者は次のように解釈する。

—中世蒙古語の少なくともある時期までは、現在、我々が言う所の《眉》と《臉》の区別が、単一語のレベルでは、まだなされておらず、直接《眉》のみを指示する語が存在しなかったか、あるいは、《眉》は《臉》(hanisqa)の一部分としてみなされていた—ものと推定する。

すなわち、中世蒙古語に見えるhanisqaの意味範囲は、先に推定した蒙古祖語の《上・下臉の部分(臉の総称)》と同一であったか、少なくとも、《眉を含む上・下臉の部分》を指示したものと推定する。

したがって、中世の文献で、漢語眉(毛)、チュルク語qaš《бровь》に対する蒙古語訳として、結果的に、次のような図式

漢語	蒙古語	チュルク語
眉(毛)：	哈泥思*合	
	hanisqa	： qaš

が成立したのは、いわば、2言語間の語彙の意味構造のずれが生んだ結果と解釈する。

私見によれば、(h)anisqa, kömöskeの意味は、蒙古祖語から、中世を経て、近世

・現代に至るまでに、次のように変化した。

蒙古祖語	中世蒙古語	近世	現代
(h)anisqa <*上・下臉> →	<(眉を含む?) 上・下臉>	→ <臉> …	
cf. jobki <臉の外角>		… → <臉>	
kömöske <*上臉> →		<上臉>	→ <眉> … →

kömöske が文献上、<臉>ではなく<眉>で現われるのは、1621年の『武備志』巻227 所収の薊門防禦考が初めてであり(眉/克木厮克と見える)、1610年の『盧龍塞略』には、<眉>に対し、哈泥思哈と見えるから、おそらく、17世紀前葉には、kömöske が<上臉>からそのすぐ上の部分、すなわち、<眉>を意味するようになり、その時点で初めて、現在、我々の言う所の<眉>と<臉>の意味に、完全に分化されるに至ったものと推定する。また、kömöske が<上臉>から<眉>を意味するようになった背景には、(h)anisqaの(h)ani-が<閉じる>という原義を保持した一方で、kömöske の*kömö-が<物を上から覆う>という原義を、中世から近世に移る間に、徐々に失っていったことが作用したものと思われる。

2. 3. (A) Mo.onisqa

Mo.onisqaに対応する現代語の諸形式は、次のようである。

- (ハルハ) оньсго 《загадка, (H)riddle》
 оньсго таах 《отгадывать загадку, (H)to guess a riddle》
- (内蒙古) onisoᠭa 《(名)謎語》
 onisoᠭa таᠭа- 《猜謎語》
- (オールドス) onisxo 《énigme》
 onisxo t'ā- 《deviner une énigme》
- (ブリヤート) оньһог
 оньһог үгэ 《поговорка》
- (カルムイク) on¹sx^D 《Rätsel》

また、Mo.ono-, no-に対する中世蒙古語及び現代語の諸形式は、次のようである。

- (秘) 幹那ー ono- 《予想する、推測する》(266)
- (イ) nō·ba 《попал, нашел》(442)

- (ハルハ) онох 《1)попадать (в цель),
2)разгадывать; угадывать, предвидеть,
3)понимать, соображать》
- (内蒙古) оно- 《(及動)①打中、撃中、命中 ②猜中、料到》
- (オルドス) оно- 《atteindre le but (en tirant), comprendre, deviner juste》
- (ブリヤート) онохо 《1)попадать (в цель),
...中略...
4)угадывать》
- (カルムイク) он°хD 《(gut) geraten, (das ziel) treffen》
- (保安語) 大墩: ноуә-/nu- 《打中》
- (東郷語) nau- 《中、命中》
- (土族語) nau- 《(撃)中、(撃)着》
- (東部裕固語) nu:- 《撃中、射中》
- (ダグール語) no:- 《打中》

筆者の考えでは、Mo. onisqaは、oni-s-qaと分析され、この-s- は、deverbal verbal suffixで、momentary aspectを表示するものと解釈する。

また、動詞語幹*oni- は、動詞ono-《当たる、命中する、言い当てる》の《単発性、一回性、瞬時性》¹⁴⁾ を表わす非生産的語幹であると推定されるから、結局の所、Mo. onisqa に対し《瞬間、パツと言い当てるもの、命中するもの》という意味を仮定することができ、これが《謎、なぞなぞ》を意味するようになったものと考えることができる。

(B) Mo. jogis-

(L) Mo. jogis-, joyos- 《vi. to have hiccups》
joy/joy tus-, joy ki- 《to startle, stop suddenly》

これに対する現代語の諸形式は、次のようである。

(ハルハ) зогьсох 《икать, (H) to have hiccups》
зог 《(副)動作の一時中断を表わす(小沢p.185)》
зог тусах, зог хийх 《внезапно останавливаться》

(オルドス) džogis- 《avoir le hoquet》
džoq 《onomat.: idée d'arrêt》

(ブリヤート) зоходохо 《1)икать (о человеке),

2)громко мычать, реветь (о породе, изюбре)》

(カルムイク) zoγ°d°χD, ǖ(zoγd°χD) 《schluchzen》 (cf. オイラト文語 zoγodxu)

筆者の考えでは、Mo. jogis-は、joγ-i-s-と分析され、この-s-を、momentary aspectを表示するdeverbal verbal suffixであると解釈する。

先ず、joγは《動作の中断》を表わす副詞的要素であることが、次の例よりわかる。

Mo. joγ tus- / зог тусах 《(H) to stop suddenly; to start》

Mo. joγ ki- / зог хийх 《(H) for an animal to stop suddenly; to break off work》

次に、その直後の要素-i-は、前述のonisqaの-i-と同様、《動作の単発性、一回性、瞬時性》を示すsuffix¹⁴⁾であると考えられる。また、蒙古文語では、jogis-と同時に、joγos-という形式も見えるから(ここに、動詞語幹*jogi-, *joγo-が抽出される)、動詞語幹*jogi-は、まさにこの動詞*jōγo-の《単発性、一回性、瞬時性》を表わす語幹であると理論的に説明することができる。したがって、Mo. jogis-に対し、《瞬間、パッと息が止まる》という意味を仮定することができ、これが、《しゃっくりをする》を意味するようになったものと考えられる。

3. 甘肅・青海省の孤立語にのみ見えるdeverbal verbal suffix -s-

Momentary aspectを表示するdeverbal verbal suffix -s-は、極めて非生産的なsuffixであるが、いわゆる甘肅・青海省の蒙古系孤立的諸言語の土族語・東部裕固語にも、その痕跡が見られ、広く蒙古語族に共通したものと思われる。

3. 1. 土族語 qimsu:l《蒼蠅》

土族語 qimsu:lに対応する蒙古文語形、中世蒙古語及び現代語の諸形式は、次のようである。

Mo. sime- (simi-)

《vt. to draw a liquid into the mouth, suck up or in; to sip; to suck (as candy)》

Mo. simayul (simuyul)

《small insect, midge, gnat, mosquito》

(秘) 食米 — šimi- 《吐》(173)

(ム) šime-/

šime·be dēl kölesün-i(333)

吸収した 外套が 汗 を

《шуба впитала пот》

(ハルハ) шимэх 《сосать, высасывать》

(内蒙古) šime- 《吮、吸、呻、抵》

(オールドス) šime- 《sucer》

(ブリヤート) шэмэхэ《высасывать сок》

(保安語) 年都乎 : çimə- 《吮、吮吸》

(土族語) çimu- 《①吸②吮》

(東部裕固語) fəmə- 《吮乳、吮吸》

(ダグール語) fim- 《吸》

(華・甲) 石模¹⁵⁾温 šimu'ul 《蠅》

(ム) šimül 《муха》(333)

(イ) sisamun¹⁵⁾ 《муха》(446)

(ラ) sisawul¹⁵⁾ 《Fliegen》(58)

(ハルハ) шумуул 《комар》

(内蒙古) simaγul 《①白蛉子(チヨウバエ)②小黑蠅③蚊子》

(オールドス) šimül(i)

《cousin, moucheron, moustique》

(ブリヤート) шумуул

《1)насекомое, 2)парн. к хорхой хорхой шумуул / насекомые》

(土族語) çimu:l(çimul) 《蚊子》

çimsu:l 《蒼蠅》

(東郷語) sunbəŋ(sunbəŋ) 《蒼蠅》

(ダグール語) fomo:l 《蚊子》

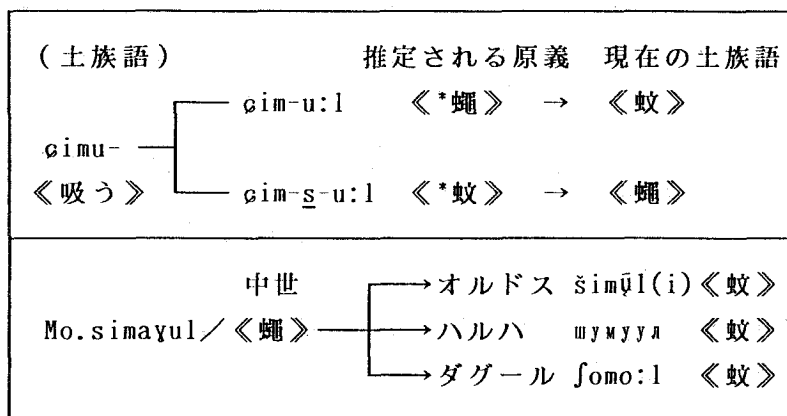
Mo. simaγul は、sima-γul と分析され、-γul は《行為者》を表示する deverbil nominal suffix である。また、蒙古語の第1音節の a~e の交替は、しばしば見られる現象であるから、動詞語幹 *sima- は、šime-《吸う》の交替形として、かつて存在した可能性があり、これに -γul が接尾し、sima·γul が形成されたものと解釈する。

さて、土族語 çimu:l は、çim(u)-u:l と分析され、まさに Mo. sima·γul に対応するものである。一方、土族語 çimsu:l は、çim(u)-s-u:l と分析され、筆者は、この -s- を deverbil verbal suffix で、momentary aspect を表示するものと解釈する。

よって、前者 çimu:l は、単に《吸う行為者》を意味するのに対し、後者 çimsu:l は、《瞬間、パッと吸う行為者》を意味し、両者は、動詞の aspect、すなわち、momentary aspect の有無による違いを反映しているものと思われる。

次に、çimu:l と çimsu:l の実際の指示物について検討してみる。両者が、仮に《蚊》と《蠅》のいずれかを指示するという前提に立てば、両者は、çimu-《吸う》する行為の時間的な aspect の差によってのみ区別され、一般に、《吸う》行為に対しては、《蚊》の方が、《蠅》よりも瞬時的であると考えられるから、元来 -s- を有する形式 çimsu:l が《蚊》を、-s- の無い形式 çimu:l が《蠅》を意味したものと推

定される（特に、*ɕimu:l*が、土族語内部で元来、《蠅》を意味したであろうことは *Mo.simayul*に対応する形式が、たとえば、ハルハ方言では、шумуул 《комар（蚊）》を意味するが、中世蒙古語にまで遡ると、『ムカディマツト・アル・アダブ』、漢蒙対訳語彙集¹⁶⁾とも、すべて《蠅》を意味していたことから、容易に想像できる）。しかしながら、実際はその逆で、土族語では、現在、*ɕimu:l*が《蚊》を、*ɕimsu:l*が《蠅》を意味している。それでは、一体なぜ、両者の意味が逆転してしまったのだろうか。詳しくは、今後の研究が俟たれるが、1つの可能性として、中世から、近世・現代に移る間に、何らかの理由で、*Mo.simayul*に対応する形式に対し、《蠅》→《蚊》に変化する一定の潮流がある言語群で起こり、土族語も、その中に巻き込まれた可能性が考えられる。



しかし、ここで重要なのは、両者の意味がなぜ、逆転してしまったという点にあるのではなく、1つの動詞語幹 *ɕimu-* から派生した2つの名詞が、deverbal verbal suffix *-s-*の有無によってのみ、両者の意味（《蠅》と《蚊》）を区別している点にある。

つまり、土族語 *ɕimsu:l*に見える deverbal verbal suffix *-s-*は、単に、*Mo.simayul*等に対応する形態上の一変種ではなく、土族語内部の語形成の上で、極めて重要な役割を果たしていると言える。

3. 2. 東部裕固語 *ta:smag*《謎語》

東部裕固語 *ta:smag*に対応する蒙古文語形、中世蒙古語及び現代語の諸形式は、次のようである。

Mo. taya-

《vt. to guess, surmise, solve a
riddle》

onisqa taya- 《to solve a riddle》

(ム) ta'ā-/

ta'āldu'ūl·ba üile-yi(338)

言い当てさせた 物事を

《заставил угадать дело》

(ハルハ) таах

《1) отгадывать, разгадывать,
2) предполагать》

(内蒙古) taya- 《(及) 猜、猜测、
猜想》

(ブリヤート) тааха

《1) отгадывать, угадывать,
2) предполагать》

(カルムイク) таах[таахь]

《предугадывать, предсказывать》

(保安語) 大墩 : ta- 《猜》

年都乎 : ta:- 《猜》

(東郷語) ta- 《猜》

(土族語) ta:- 《猜》

(東部裕固語) ta:- 《猜》

Mo. tayamay

《adj. presumptive, hypothetical,
suppositional》

(ハルハ) таамаг 《предположительный》

(内蒙古) tayamay

《(名) ①臆度、臆想、臆測
②推想、推測》

(ブリヤート) таамаг

《1) загадочный, таинственный,
2) гадательный, предположительный》

(カルムイク) таамһа

《редко 1) загадочный,

2) предположительный》

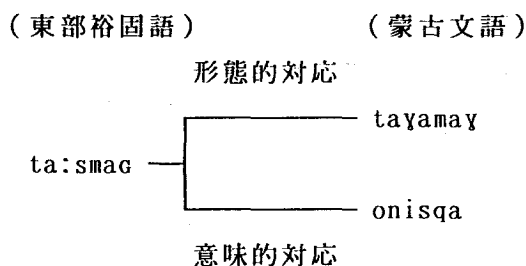
(東部裕固語) ta:smag 《謎語》

ta:smag ta:- 《猜謎語》

東部裕固語 ta:smag は、ta:-s-magと分析され、-mag(Mo.-may/meg)は、《行為の結果、生じた状態やもの》を示す deverbial nominal suffix である。また、この -s- は、momentary aspect を表示する deverbial verbal suffix であると解釈する。ここで、ta:- は、《言い当てる》の意味であるから、東部裕固語 ta:smag は、《瞬間、パツと言い当てるもの、解くもの》という意味を仮定することができ、これが、《謎、なぞなぞ》を意味するようになったものと考えられる。

さて、形態的に、東部裕固語 ta:smag と対応するのが、蒙古文語 tayamay、ハルハ raamar、ブリアート raamar、カルムイク raamba であるが、これらはおおむね、《予想された、推測の／予想、推測》を意味し、東部裕固語の《謎語》（謎、なぞなぞ）とは、意味の上でやや開きがある。意味上、むしろ一致するのは、2. 3. (A) で述べた Mo. onisqa である。

したがって、東部裕固語の ta:smag に見える deverbal verbal suffix -s- は、単に Mo. tayamay 等に対応する形態上の一変種を反映しているのではなく、東部裕固語内部の語形成の上で、これまた、重要な役割を果たしていると言えよう。



4. 『蒙古秘史』に見える deverbal verbal suffix -s- 脱_動乞思一

ここでは、deverbal verbal suffix -s- が、『蒙古秘史』の中で、momentary aspect の意味を表示するものとして用いられていた可能性があることに、言及しておきたい。場面は、『蒙古秘史』の56節で、後に、チンギス可汗の母となるホエルンが、イエスゲイに略奪された有名な場面である。この文の主語は、ホエルンである。

……斡難 沐_動漣泥 脱_動乞思塔刺 槐主不児
 河名 河行 震動波浪 林川
 Onan müren-i tolkis·tala hoi jubur
擣兀_動里思塔刺 也客擣兀巴児 委亦刺周 阿亦速恢突児…
 震動 大 声裏 哭着 意的 時
 dau'üris·tala yeke dau'ū-bar uiyila·ju ayis·u·qui-dur

この箇所の主な現代語訳¹⁷⁾を掲げると、次のようである。

那河(1907)《…斡難河を波立たすまで、林河原を震動すまで、大聲に哭きて來つる時…》

小林(1941)《…オノンの流れに浪立たすほど、林や川原を震ひ動かすほど、大聲で哭き乍ら來ると…》

岩村(1963)《…オナン河に波立つほどに、林や河原をふるわせるほどに、泣いた。
…》

村上(1970)《…オナン河の波響動むまで、林や川原辺の振るうまでに、大声で泣いてくると…》

小沢(1984)《オナン河の波だつまで、森林のとよむまで、大声にて泣きて行くに…》
Дамдинсүрэн, Ц. (1976)

《…Онон мөрнийг долгилтол, ой шугуйг ганхтал их дуугаар уйлахад…》

小沢(1984)が指摘したように¹⁸⁾、秘史に見える脱_執乞思- (tolkis-)は、語頭子音の無声・有声の違い¹⁹⁾はあるものの、形態的には、Mo.dolgis- に対応するのは間違いないであろう。

これに対する現代語の諸形式及び意味は次のようである。

(ハルハ)

(H) долгиох 《to be tormented; to be agitated》

cf. долгих 《to wave, undulate》

долгилох 《to move in waves; to be agitated》

(内蒙古)

(蒙漢) dolgis- 《(不及) ①顫抖、悸、悸栗 / jirüke~心悸 ②抽痛…》

cf. dolgi- 《(不及) 起浪、波動 / usu~水起浪》

dolgila- 《(不及) 翻浪、浪涛洶涌、波浪滾滾…》

(ブリヤート)

долгисохо 《волноваться (о человеке)》

cf. долгилохо 《1) плескаться, подниматься, вздыматься (о волнах),
2) волноваться (о волнах, ниве)》

hanaa сэдхэлээ долгисохо / зүрхөө (или зүрхээ) долгисон хэлэхэ

気持ちが 動揺する 心臓が ドキドキし 話す

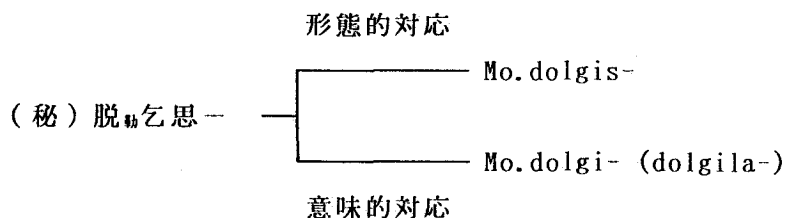
долгилхо салгидаха / далай бага зэргэ долгилон байгаа

(海が) 波立つ 海が わずかに 波立っている

以上の結果、ハルハモンゴル語では、долги-とдолгис- は、互いに趣を異にし、前者は、実際に《波立つ》を意味するのに対し、後者は、主に精神的に《波立つ》、すなわち、《動揺する、興奮する》を意味するようである¹⁸⁾。また、この区別は内蒙古方言にもほぼあてはまる。一方、ブリヤート語においては、この区別が、долгил-とдолгис-の間に確認され、前者は、主に《о волнах (波について)》、後者

は、もっぱら《о человеке (人について)》、用いられる。

さて、いよいよ本論に入り得る段階となったので、ここで、秘史に見える脱_執乞思_一について、今度は意味の面から考察してみたい。本文では、実際にオナン河が《波立つ》ことを表わし、ホエルンがイエスゲイに略奪され、精神的に《波立つ》すなわち、《動揺する》を表わしているのではないと解釈されるから、秘史の脱_執乞思_一は、意味的には、Mo.dolgis- (ハルハдолгисох、ブリヤートдолгисохо)よりはむしろ、Mo.dolgi- (ハルハдолгих)またはMo.dolgila- (ハルハдолгилох、ブリヤートдолгилхо)に近いことになる。このことは、(秘)脱_執乞思_一を、直接Mo.dolgis-と比較するのではなく、むしろ、dolgi-s-と分析し、Mo.dolgi-と比較する方が、本文の意に即していることを示唆している。

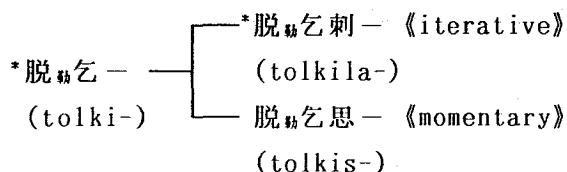


筆者の考えでは、(秘)脱_執乞思_一(tolki-s-)の-s-は、momentary aspectを表示するdeverbal verbal suffixと考えられるから、本文は、次のようなニュアンスを含む文と理解したい。すなわち、

…オナン河が、(一瞬・突然・突如として)波立つほど、
森林に 響きわたるほど、
大声で泣いて行く時、…

また、前後の文脈からすれば、《(何度も)波立つほど》の如く、この-s-を、iterativeの意味に理解することも全くの不可能ではなかろう。しかし、そうすると、中世²⁰⁾、現代²¹⁾を通じて、かなり生産的なiterative suffix -la²⁻ (V→V)が、ここでなぜ、脱_執乞刺_一(tolkila-)の如く用いられず、極めて非生産的なsuffix -s-が、脱_執乞思_一(tolkis-)の如く用いられたのかという新たな疑問が生ずるため、この立場はとりかねる。

したがって、秘史の言語で推定される派生関係及びその意味は、次のようになる(ただし、*は秘史の文献では実証されないことを示す)。



なお、Ц. Дамдинсүрэнが、現代語訳（ハルハモンゴル語）で、долгилтол の如く долгил- という語を用いている。これは、秘史の脱_{ᠮᠤ}乞_ᠢ思_ᠢ-が、その後、元来の momentary aspect の意味を失い、主として精神面に転用され、実際の《波立つ》行為が、dolgi-, dolgila- に委ねられたためであり、しかも、《波立つ》行為を、より生き生きと描写的に表現する—海、河の水が、実際に波立つのを表現する—には、dolgi- よりも、多回体の dolgila- を用いる方が、より自然であるためであろう。

しかし、このことは、逆に、ハルハモンゴル語の долгил- が、脱_{ᠮᠤ}乞_ᠢ思_ᠢ- 元来の意味を包含するようになったという意味では決してないことにも注意したい。

5. おわりに

以上、分析の結果、deverbal verbal suffix -s- は、momentary aspect 表示をその主たる意味として、非生産的ながらも広く蒙古語族に共通して用いられることが明らかとなった。

とは言え、語の意味が一義でないように、suffix 本来の意味もまた一義とは限らないのは当然のことである。したがって、本稿では、あくまでも deverbal verbal suffix -s- の中心的な意味を明確にしたに過ぎない。周辺的な意味に関しては今後さらに様々な例に対処することによって考究されなければならない。

最後に、今後に残された問題点を指摘しておくことにする。

1. 一般に、deverbal verbal suffix -s- は、同じく deverbal verbal suffix -d- と形態及び意味的にどのような関係にあるのか。たとえば、momentary aspect を表示する場合、suffix -s- があくまでも本来的(primary)なもので、suffix -d- は、単に音声変化の結果を反映した2次的(secondary)なものに過ぎないのか、あるいは suffix -d- にも、suffix -s- 本来の意味を一部包含しており、両者が古い時代に交替していたのかという問題である²²⁾。

2. 中世の文献『蒙古秘史』の言語では、もっぱら「-s 動詞」表現として suffix -s (Ramstedt(1902)の言う Converbium momentanei 《瞬間副動詞》²³⁾、小沢(1984-1989)の言う《副詞的動態言に接尾し、動作の瞬間性を表わす接辞》)が現われるが、これと本稿で述べた momentary aspect を表示する deverbal verbal suffix -s- を、一体どのような関係で把えるべきなのかという問題である。

以上の2点が、今後に残された大きな課題である。

註

1) Ramstedt, G.J. (1912)

Zur Verbstammbildungslehre der mongolisch-türkischen Sprachen.

Journal de la Société Finno-Ougrienne. XXVIII. §61.

Ramstedtは、Deverbale Verba auf -d- ~ -s- という項目を設け、deverbal verbal suffix -s-と-d-を一括して取り扱っている。なお、この点に関して、本文の5. おわりにの1.で問題点を指摘した。

2) suffixの右肩の数字は、母音調和による異形態の数を示す。

3) ダグール語では、

bais- 《(動) 歓喜、高興》(Mo. bayas-)

baiskulun 《(名) 喜、歓楽》(Mo. bayas-qulang)

と同時に、

baisk* 《(形) 高興的》(Mo. —)

という形式が実証される。これは、

1. (ム)のüjesküが、脱字ではなく実在形式であった。

2. ダグール語内部で、baiskulun→baisk*へback formationが起こった。

のいずれの可能性にとっても有利であると思われる。

しかし、1., 2.のいずれの場合にせよ、deverbal nominal suffix-qulang²の要素-qu²は、deverbal verbal suffix(V→V)よりむしろdeverbal nominal suffix(V→N)に有利であるということは注目すべきである。

4) Ramstedt, G.J. (1976 rpt.) Kalmückisches Wörterbuch. Helsinki. p.239.

5) 小沢重男 (1978) 『モンゴル語と日本語』 東京 271-273.

6) Mo. anisqa(ani-s-qa), kömöske(kömö-s-ke)に見える語末の-qa/-keは、deverbal nominal suffixで、-ya/-ge(*-gaa²ではなく*-ga²)の音韻的に条件付けられた異形態である。

-ya ² / _____	{ l r }	+ _____
~ -qa ² / _____	{ s d }	+ _____

(+ … morphological boundary, ~ … phonologically conditioned allomorphs.)

e.g. tul-	《支える》	>	tulɣa	《五徳》
orčiyul-	《翻訳する》	>	orčiyulya	《翻訳》
nidur-	《軽く突く》	>	nidurɣa	《こぶし》
egür-	《背負う》	>	egürge	《荷、義務》 etc.

7) 服部によれば、Mo.anisqa は、中世の文献『華夷訳語』で哈泥思*合(hanisqa)、土族語でxanasqa と見え、いずれも《眉》を意味するが、動詞ani-《閉じる》と比較すると、《臉》を最古の意味としてもつ可能性が高いという。しかし、Mo.kömöske《眉》との関連において、どのような経過をたどって意味変化が生じたのかについては何ら言及がない。

(服部四郎(1940)「蒙古語の口語と文語」 『服部四郎論文集 第1巻 アルタイ諸言語の研究I』(1986)東京 355-404.)

8) 『事林広記』巻之10所収。

9) 『武備志』巻227所収。

10) 『三合便覧』(1780)は、3言語で書かれた語彙集で、満州語、漢語、蒙古語、満州文字転写による蒙古語の順で、記されている。本文では、便宜上、満州文字転写による蒙古語は、()に入れて表記した。

11) 『土族語詞彙』(1986)では、土族語・東溝方言のkomosgo に対し、漢語訳《眼簾》が当てられている。これは、内モン出身の知人によると、《上眼皮》(上臉)に対する文学的語彙という。もし、土族語komosgo の意味が、《臉》よりもむしろ《上臉》の方によりの確であるならば、先に推定した祖形の意味は、土族語において、まさに保持されていることになる。

12) Mo. jobkiの意味については、次のように見える。

(II) угтаа хүн амьтны нүдний аньсгын гадаад өнцгийн нэр;

元来 人間の 目の 瞼の 外 角の 名称

одоо нүдний дээд доод аньсгын нэр

現在 目の 上・下 瞼の 名称

(H)(obsolete) outer corners of the eyelids; eyelid;

(蒙漢) ①眼角②眼瞼

13) ハルハの友人の話では、モンゴルでは、

дээд зовхи татвал баярлахын сайн тэмдэг

上 瞼 ピクピクすれば、喜びの 吉 兆

доод зовхи татвал уйлахын муу тэмдэг

下 瞼 ピクピクすれば、悲しみの 凶 兆

という言い伝えがあり、下瞼がピクピクした時は、瞼に白い木片を貼ってまじないをすれば、災いを免れるという。

14) 小沢の詳細な研究によれば、-i- は《動作の単発性、一回性、瞬時性》を表わすsuffixであると考えられる。

-i- : -yu²-, -qu²-, -gi- etc.

《動作の単発性》 《動作の持続性》

e.g. бүр-i- : бүр-kü-

《おおう》 《曇る(←持続的におおう)》

qal-i- : qal-gi-

《液体がこぼれる》《液体がこぼれつづける》

qaltu-r-i- : yul-yu-

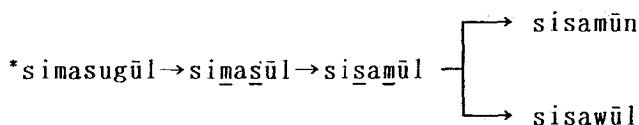
《滑ってころがる》《持続的に滑る》

(小沢重男(1978)『モンゴル語と日本語』 東京 p.164, 166, 244, 258, 275, 311.)

15) 中世のアラビア字蒙古語文献「イブン・ムハンナ」、「ライデン」に見える形式、sisamun《муха》, sisawul《Fliegen》に対して、N. Poppe(1928, p.58)は「両形とも、Mo. simayulからのKorruption《訛り》かもしれない」とだけ述べるが、筆者は、両形は形態的には、*simagül (Mo. simayulの直接の祖先)よりはむしろ、deverbal verbal suffix -s- を有する形式、すなわち、*simasugül (*sima-s-u-gül)に由来する蓋然性の方が大きいのではないかと考える。

私見によれば、*simasugül は、第2音節頭子音mと第3音節頭子音sがme-

tathesisを起こした結果、



の如く変化したものと推定されるが、「イブン・ムハンナ」、「ライデン」の形式は、この変化過程の最終段階をそれぞれ反映しているのであろう。

16) 中世の漢蒙対訳語彙集では、漢語の《蠅》に対する蒙古語は、次のように見える。

《蠅》

至元訳語 (1325): —

『華夷訳語』(1389): 石模⁷温

『盧龍塞略』(1610): 石莫温

薊門防禦考(1621): 暑抹温

蒙古語族では、一般に、Mo. *simayul*, *bököne*, *ilaya*, *batayana*の4語に対応する語は、方言によって、その指示物が異なり、意味変化の跡をたどることは極めて難しい。したがって、ここでは、前述したMo. *simayul*を除く3語に対し、形態的分析を行ない、各方言における意味を呈示するにとどめたい。

(A) Mo. *bököne* (*bökögene*)

《蚊》を表す語は、ハルハ方言では *mymyy* (Mo. *simayul*)、内蒙古のある方言(ホルチン等)では、*batgan* (Mo. *batayana*)だが、中世の漢蒙対訳語彙集では、次のように、全く別形式で現われる。

《蚊子》

至元訳語 (1325): 播勾拿

『華夷訳語』(1389): 孛可兀納

『盧龍塞略』(1610): 孛可兀納

薊門防禦考(1621): 孛口納

これに対する蒙古文語形は、*bököne* (*bökögene*)である。

(L) *bököne* 《horse-fly, gadfly》

(III) *bököne* 《yeke sira batayana》

(蒙漢) *bökögene* 《yeke bökögene (大黃蚊)》

(III) *bökögene* 《yeke bökögene-yin》

bökōne(bökōgene)は、bökō-ne(bökō-gene)と分析され、語末の-ne(-gene)は、一般に、《動植物名》を形成するsuffix、

1. simple suffix -na²

e.g. yu-r-ban 《3》>yu-na 《3歳の雄》 (>yuna-jin《3歳の雌》)

dö-r-ben 《4》>dö-ne 《4歳の雄》 (>döne-jin《4歳の雌》)

2. denominal nominal suffix -yana²(*-ya-na²)

e.g. qula 《葦毛色の》、qulu-su 《葦、竹》>qulu-yana 《ねずみ》

3. extended compound suffix -ljiyana²(-lji-yana²)

e.g. güjege 《反すう動物の胃》>güjege-ljigene 《イチゴ》

等に見られるものと同一suffixと推定される。

一方、名詞語幹bökōは、おそらくbökō《ラクダのこぶ》と同一語幹であろう。蒙古語では、一般に、語根*bō-のあるものは《丸い》という意味を共有していることから察するに、bökōne(bökōgene)は、元来《(ラクダのこぶのように)丸々と肥えたもの》という意味を有していたものと考えられる。

また、これに対する現代語の対応形は、次のようである。このうち、基礎語彙として、明らかに《蚊》の意味を保持しているのは、カルムイク語と東部裕固語である。

(ハルハ)	бөхнө	《слепень, (H)horse-fly (牛虻)》
(オールドス)	bö ^{*k} χöŋ	《cousin, moucheron》
(カルムイク)	бөкүн[бөкүүнө]	《комар》
	bökünə	《Mücke》
(東部裕固語)	bəgdəg	《蚊子》
(土族語)	pugunag	《牛虻》

(B) Mo. ilaya

これは、ila-yaと分析され、ila-は《ベタベタ塗りつける》意の動詞語幹であり、-ya(*-gaa)は、deverbal nominal suffixである。したがって、Mo. ilayaは、元来《ベタベタ塗りつけるもの》が原義であり、これが、現代語の各方言で、《蠅、蚊、虻》などを指示するようになったものと考えられる。

cf. ila- (ялах) ~ nila- (нялах) 《塗りつける》

ilčayı- (ялцайх) ~ nilčayı- (нялцайх) 《ベタベタ、ネバネバしている》

ilčayai (ялцагай) ~ nilčayai (нялцагай) 《ベタベタ、ネバネバした》

また、これに対する中世及び現代語の対応形は、次のようであるが、第2音節の母音の違いから、A. *hilagaa系とB. *hilugaa系に二分でき、祖形の動詞語

幹の第2音節に、a~uの母音交替(*hila~*hilu-)があつたものと推定される。

A.

- (ハルハ) ялаа 《муха》
(内蒙古) jala: 《蒼蠅》
(バルガ) jala: 《蚊子》
(ブリヤート) илааһан 《мошка, мошкара》
(カルムイク) ilēsŋ(selt.ilāsŋ) 《Motte》
(ダグール) xila: 《牛虻》

B.

(秘) hilu'ā 《馬虻》(188)

(オルドス) ilō 《taon》

cf. 『三合便覽』(1780): derxuwe, 蒼蠅, ilaya (ilaga)

(C) Mo. bataγana

これは、bata-γana と分析され、語末の-γanaは、(A) Mo. bōkōneで述べたように、《動植物名》を形成するdenominal nominal suffixであろう。一方、名詞語幹と思われる*bata は、蒙古語族内部では、実証不可能であり、いかなる意味を有するかは、現在の所、不明である。

また、これに対する現代語の対応形は次のようである。

- (ハルハ) батагана 《муха, (Ц) нэг зүйл ялаа》
(内蒙古) batgan 《①蚊 ②〈方言〉蠅》
(オルドス) vataḡana 《mouche》
(ブリヤート) батаганаа 《мухи, муха》
(カルムイク) батхи [батхънь] 《муха, мухи》
batxan^o, batx^ond 《Fliege》

cf. 『三合便覽』(1780): galman, 蚊子, bataγana (batagana)

17) 那珂通世 (新版1943, 旧版1907) 『成吉思汗実録』東京 p. 31.

小林高四郎 (1941) 『蒙古の秘史』東京 p. 20.

岩村忍 (1963) 『元朝秘史』東京 p. 15.

村上正二 (1970) 『モンゴル秘史 1』東京 p. 71.

小沢重男 (1984) 『元朝秘史全訳 (上)』東京 p. 232.

Дамдинсүрэн, Ц. (1976) Монголын нууц товчоо. Улаанбаатар. p. 29.

18) 小沢の指摘を、原文のまま引用すれば、次のようである。

— 「tolgistalaは、当然、tolgis-talaであるから、語幹は、tolgis-である。傍訳の〈震動波浮〉に近い意を表わす語にdolgi-《波立つ、(水などが)うねってゆれる》がある。dolgis-もあるが、形の上でtolgis-に近似するこの形は、

意味の上で、dolgi-より幾分遠い感がある。⁽¹⁾とは言え、秘史のtolgis-が語頭子音の清濁のちがいはあるものの、このdolgis-であることは疑いない。

⁽¹⁾ dolgis-は、同じ《波立つ》の意なのだが、現代語では、主に精神的に《波立つ》のであって、即ち《精神的に動揺する、興奮する》の意味である。

そこでこの句全体の意味は、《オナン河（の水）が波立つまで》となる。

…中略…

なお、このdolgi- から作られるdolgiyan、現代モンゴル語のдолгионは当然のことながら、《波浪、波濤》の意を表わす名詞である。」—（波線は、筆者加筆）

（小沢重男（1984）『元朝秘史全釈（上）』東京 235-236.注(10)）

- 19) 秘史の言語で、なぜ、脱_キ乞思-(tolkis-)が用いられ、多_キ乞思-または朵_キ乞思-(ともにdolkis-と転写される)が用いられなかったのか、甚だ疑問である。ただし、秘史に見える語頭のt-は、現代語の語頭のd-よりも古い音声状態を反映しており、同源・借用の問題は別として、チュルク系言語の語頭のt-と結びつく可能性がある。

たとえば、モンゴル人民共和国・最西端のバヤン・ウルギー州のカザフ語は、蒙古語と次のように対応する。

カザフ語	Mo.	(ハルハ)
《波立つ》	толк-	dolgi- долги-
《波》	толқын	dolgiyan долгион

また、中国領内のチュルク系言語では、《浪、波》に当たる語は、次のように見える。

カザフ語	tolqan	タタール語	dolqun
キルギス語	tolqun	ウイグル語	dolqun
ウズベク語	tolqin		

しかし、秘史の語頭のt-が、起源的にチュルク系言語のそれと結びつく可能性を認めたとしても、それが、なぜ、中世以後に蒙古語内部で軟音化したのかという問題が残る。これに対する1つの解釈として、語頭子音t-は、第2音節頭の硬音との異化によって軟音化した可能性が考えられる。小沢は、脱_キ乞思-に対して、tolgis-と転写するが、第3字の乞は、本来kiと読める(cf. (秘)乞-(ki-)《倣》、乞木_キ(kimul)《指甲》、乞秃_キ孩(kituqai)《刀子》等)から、正しくは、tolkis-と転写すべきであろう。したがって、ここに、語頭の硬音tと第2音節頭の硬音k(gではない)との異化によって、語頭子音の軟音化

が生じたとする考えが成り立つわけである。また、次の例も、その1例と見なすべきであろうか。

(秘) Mo. (ハルハ) (カルムイク)
 《戒》 客辭-(kese-)(53) : ges- гэс- kes-
 (cf. (秘) 客列(kele)《話》、客納ken-ü《誰的》等)

(この例については、小沢重男(1984)『元朝秘史全釈(上)』東京 p.218. 注(5)参照)

しかし、異化による語頭子音の軟音化と言え、蒙古語南方方言特有の音変化であり、もし、秘史の言語と現代語との間に、この変化を認めるならば、同一タイプの音変化を、少なくとも2つの異なる時代に設定することになるため、この解釈にもやはり無理があると言わざるをえない。今後の一層の研究が俟たれる。

20) 秘史の言語では塔塔刺-(tatala-)《何度も引く》、木^𐰃兒古列-(mürgüle-)《何度も突く》の如く、多数の例が見られる。

21) Д. Отгонсүрэнの調査によると、deverbal verbal suffix -л- (Mo.-la²-)は、ハルハモンゴル語では、50余りの動詞語幹に接尾されるという。
 (Отгонсүрэн, Д. (1982) Орчин цагийн монгол хэлний үйл үгийн хэв, байдлын дагаврын найруулгын үүрэг. Улаанбаатар. p.148.)

22) 本稿で述べたdeverbal verbal suffix -s- (音節末)は、各方言間で、必ずしも規則的な対応を示すわけではなく、次のように対応にばらつきが見られる。

	Mo.	(ハルハ)	(カルムイク)	(ブリヤート)	
1.	-s- :	-s- :	-s- :	-d-	(規則的対応)
	kömös <u>ke</u>	хөмсөг	күмсг	хүмэдхэ	
2.	-s- :	-s- :	-d- (?) :	-d-	
	jogis-	зогьс-	зоу ^o d-	зоход-	
3.	-s- :	-s- :	-s- :	-s- (?)	
	üjes <u>k</u> üleng	үзэсгэлэн	üz ^u skөлг	үзэсхэлэн	

ここで、2.のカルムイク語の-d- は、同系言語内部の語借用に伴う2次的な対応を反映しているのか、あるいはカルムイク語の古い段階ですでに-d- を有していた(古い時代の-s~-d-の交替)のか判断は非常に難しい。

また、3.のプリアート語の-s-は、蒙古語本来の音節末のsがプリアート語でdに変化した後に、近隣のハルハ方言から借用された結果を反映しているのであろうか。

これらは、音声面からのアプローチとともに、同系言語内部の語の借用問題と相まって考察しなければならない問題である。

23) Ramstedt, G.J. (1902)

Über die Konjugation des Khalkha-Mongolischen. MSFOu. XXI.

その他、村山の論文も参考になる。

村山七郎 (1951) 「元朝秘史蒙古語における-sに終るConverbum」 『言語研究』第19・20号。

各資料の出典及び若干の略語は次のようである。

(蒙古文語) : (Mo.)

Lessing, F.D. (1960) Mongolian-English Dictionary. Berkeley and Los Angeles.: (L)

Šayji (1937) Mongγol üsüg-ün dürim-ün toli bičig. Ulaγanbayatur.: (Ш)

『蒙古秘史』 : (秘)

額爾登泰・烏雲達寶 (1980) 『蒙古秘史 校勘本』呼和浩特

小沢重男 (1984-1986) 『元朝秘史全釈(上・中・下)』東京

(1987-1989) 『元朝秘史全釈続攷(上・中・下)』東京

『ムカディマツト・アル・アダブ』 : (ム)

Полпе, Н.Н. (1971 rpt.) Монгольский словарь мукаддима ал-адаб. England.

「イブン・ムハンナ」 : (イ)

Полпе, Н.Н. (1971 rpt.) Список монгольских слов из глоссария Ибн-Муханны по изданию Муаллима Риф'ата (Истамбул, 1921).

Приложение IV. Монгольский словарь мукаддима ал-адаб. England.

「ライデン」 : (ラ)

Poppe, N. (1927-1928) "Das mongolische Sprachmaterial einer Leidener Handschrift". Известия Академии Наук СССР. 1009-1040, 1251-1274 (1927), 55-80(1928).

(ハルハ)

Лувсандэндэв, А. (1957) Монгольско-русский словарь. Москва.

Цэвэл, Я. (1966) Монгол хэлний товч тайлбар толь. Улаанбаатар.:(Ц)

Hangin, G. (1986) A Modern Mongolian-English Dictionary. Indiana University.:(H)

小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』東京

(内蒙古)

内蒙古教育出版社編 (1975) 『蒙漢辞典』呼和浩特

内蒙古大学蒙古語文研究室編 (1976) 『蒙漢辞典』呼和浩特:(蒙漢)

(オルドス)

Mostaert, A. (1968 rpt.) Dictionnaire Ordos. New York/London.

(バルガ)

武達等編 (1983) 『巴爾虎土語詞彙』呼和浩特

(ブリヤート)

Черемисов, К.М. (1973) Бурятско-русский словарь. Москва.

(カルムイク)

Ramstedt, G.J. (1976 rpt.) Kalmückisches Wörterbuch. Helsinki.

Муннев, Б.Д. (1977) Калмыцко-русский словарь. Москва.

(オイラト文語)

確正扎甫・巴德瑪等編 (1979) 『蒙文和托忒蒙文对照蒙語辞典』新疆人民出版社

(保安語)

大墩 (保安語・大河家方言 (別名、積石山方言) に属する) :

布和・劉照雄 (1982) 『保安語簡志』民族出版社

年都乎 (保安語・同仁方言に属する) :

陳乃雄等編 (1986) 『保安語詞彙』呼和浩特

(東郷語)

布和等編 (1983) 『東郷語詞彙』呼和浩特

(土族語)

東溝方言 :

哈斯巴特爾等編 (1986) 『土族語詞彙』呼和浩特

那龍溝方言 :

de Smedt, A. and A. Mostaert (1933) Dictionnaire Monguor-Français.
Pei-p'ing.

(東部裕固語)

保朝魯等編 (1985) 『東部裕固語詞彙』呼和浩特

(ダグール語)

モリンダワー方言：

恩和巴圖等編 (1984) 『達斡爾語詞彙』 呼和浩特

ハイラル方言：

Поппе, П. Н. (1930) Дагурское наречие. Ленинград.

Poppe, N. (1934-1935) "Über die Sprache der Daguren." Asia Major.

Vol. X, fasc. 1, 2.

(満州文語)：(Ma.)

羽田享 (1937) 『満和辞典』 京都

福田昆之 (1987) 『満州語文語辞典』 FLL

(錫伯語)

李樹蘭・仲謙・王慶豊編 (1984) 『錫伯語口語研究』 民族出版社

(しおたに しげき、博士後期課程)